

10 障害児教育

伊藤福男・竹林地毅・木村敦子
兼樹 透・森富 恵

1. 研究テーマのとらえ方

(1) 養護学級の教育目標と感性について

本学級では、「生活力のある児童」を目指している。「生活力のある児童」の姿として次の3つの力を描いている。

- ・ことばや行動で自己を十分に表現し、主体的に行動する力
- ・さまざまな集団やいろいろな人とのかかわり合いの中で、生活や学習をする力
- ・いろいろな場面で、判断したり、工夫したり継続したりして生活や学習をする力

この3つの力を総合すると、「児童がその子なりの考えを持ち、よりよい方向を目指して進んで考え、判断し、表現する（行動する）力であり、この力を持つ児童が「生活力のある児童」と考えている。

(2) 昨年度の研究テーマ「自己を高める評価力の育成」の取り組み

児童自身が行動や学習活動を振り返ることにより、自分の行動や活動を見つめ、次の行動への期待や見通しを持って主体的に関わろうとする力を身につけると考えている。

この「行動や学習活動の振り返り」を児童の自己評価ととらえ、その「行動や学習活動の振り返り」のためには、「活動の仕方がわかっている」「活動の見通しを持っている」ことが重要と考え、児童の実態と教師の手だてのあり方の追求を昨年度は行った（平成4年度研究紀要参照）。

「行動や学習活動の振り返り」を行うためには、児童自身が自分の行動や学習活動に何かを感じ、気づき、働きかけをすることが重要である。そして教師がその時児童の気づきと感じたことを援助することの重要性が明らかになった。

(3) 研究主題「豊かな感性を育む」について

感性とは、「価値あるものに気づく感覚」「物や事象に何を感じ表現するかという」ことであり、さらに問題を追求すると定義されている（片岡徳雄）。この「感じ」「気づくこと」「表現すること」「追求すること」は、決して受動的な活動ではなく能動的な活動である。

本学級の目指す「生活力のある児童」の3つの力は、児童自身が受動的なものではなく、能動的に追求活動を行う姿を描いていると言えよう。

昨年度の研究紀要で報告した児童の「行動や学習活動の振り返り（自己評価）」は、児童自身が、それぞれの児童なりに行動や学習活動に振り返ることにより、「気づき」「感じる」「表現する」（障害児教育では、追求することも含む）能動的な活動そのものとする。「生活力のある児童」を目指した授業構成や「行動や学習活動の振り返り」（自己評価）を促進していくことは、「気づく」「感じる」「表現する」の「豊かな感性」を育成することに合い通じるものとする。

児童一人一人の「気づく」「感じる」「表現する」授業を創造していくためには、教師自身も児童の「気づく」「感じる」「表現する」に「気づき」「感じる」「表現する」感性を持ち支援していくことが大切である。

2. 感性を育む支援のあり方

児童の豊かな気づきを支え、表現力を高めるためにはどのような支援の方法があるか。

豊かな気づき……………・個の生活体験に基づいている。

・刺激を与える素材である。

表現力を高める……………・表現意欲を持ち、表現を楽しむことができる。

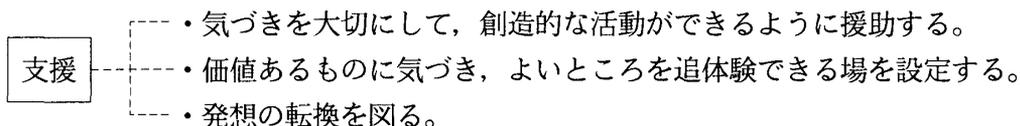
・発想が広がり、一面的な価値判断が変わる。

(1) 児童の感性をどのようにとらえていくか

児童の感性は、その児童のとりまく人との関係、対象となる物、場の設定によって変わるものであり、固定的なものではないとした上で、実態を次のようにとらえていく。

気づく	1 対象に気づいていない。 2 一瞬対象に気づく。 3 対象に気づくが、受け入れていない。
感じる	4 対象を感じ、受け入れる。迷いながらも対象のほうへ行く。 5 単発的に対象に働きかける。 6 感じたことを、自分が好きなような方法で対象にはたらきかける。
表現する	7 イメージして対象にはたらきかける。 8 友だちや教師の模倣をして表現する。 9 自分なりの表現を工夫する。 10 相互関係の中で、はたらきかけあいながら表現する。

(2) 教師の支援の方法



教師の支援のあり方については、教師自身が扱う素材・題材に感じている、教師自身が多様な表現方法を身につけている、といったことを前提として次のように考えられる。

気づく	↓ ← ← ↑	1 児童の姿に気づく。
感じる	↓ ↑	2 児童の実態に気づく。
表現する	↓ ↑	3 児童の姿を意味づける。
表現する	↓ ↑	4 児童の姿に共感したことを表現する。
表現する	↓ → → ↑	5 児童のイメージを広げることばかけ、資料の提示をする。

授業研究においては、教師支援のあり方が適していたかどうか、適していないとすればどの点で児童とのずれがあるかを検討していくことにした。